

長田夏樹氏の契丹語ノートなど
—接尾語備忘録—

吉池孝一

1. 序言

ここに故長田夏樹先生の大学ノート一冊がある¹。表紙には“契丹語ノート V大金皇帝經略郎君行記 IV興宗仁懿皇后哀冊”とあり、中には契丹小字とその漢語訳と小字の音価が記されている。さらにノートの初頭と末尾には、書き込みのあるメモ用紙や図表など、大小さまざまな紙片が挟み込まれている。それらのうち、『KOTONOHA』103号において「契丹原字出度表」を²、『KOTONOHA』105号において「契丹原字音価表」を紹介した³。いずれも『慶陵』(田村實造・小林行雄著。1953年3月刊行)に付された2枚の表「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」(以下「接尾語表」と呼ぶ)を作製するための資料とみられる。今回紹介する資料はその「接尾語表」に係わる内容が記されたメモ用紙である⁴。メモの中には、名詞語幹に接辞を付して動詞を作ったり、動詞語幹に接辞を付して名詞を作ったりするなど契丹語を拡張する様子が記されており、『慶陵』の「接尾語表」の構成を理解する上で極めて有用な資料となるとともに、1950年代初期の日本の契丹語研究の水準の高さを証するものともなろう。なおこれ以降当該のメモを「接尾語備忘録」と呼ぶ。

¹ 平成23年1月末、故長田夏樹先生の契丹語と女真語の研究に係わるノートやカードなどを長田家よりお寄せいただいた。長田夏樹氏はこの方面における研究の先駆者の一人であり、ノート類は契丹文字と女真文字の解読の経緯を明らかにするうえで得がたいものとなるはずである。まずもって遺品の使用をお許しくくださった長田家の皆様に感謝もうしあげる。これらについては斯界共通の資料とすべく順次紹介をさせていただく。

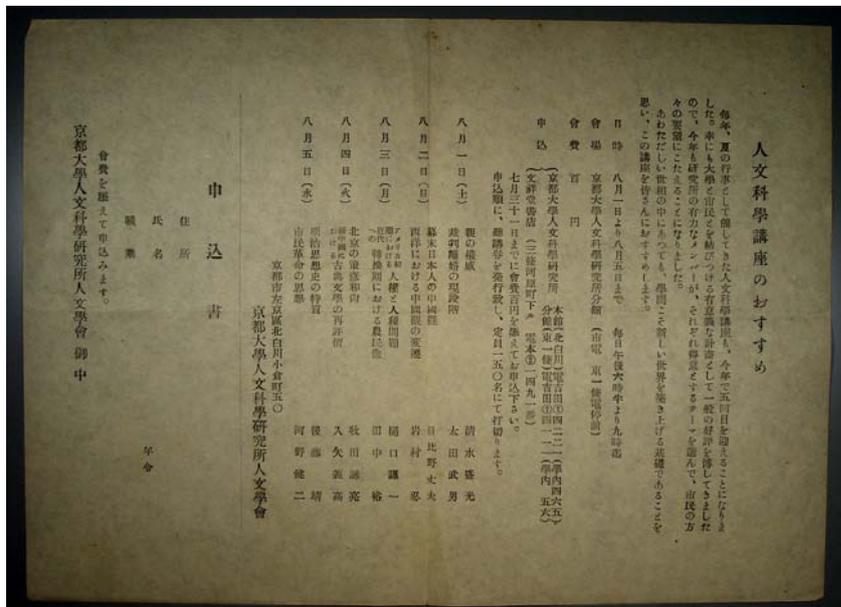
² 吉池2011b。「契丹原字出度表」は、61種の契丹原字につき、道宗哀冊と宣懿皇后哀冊における詞頭・詞中・詞尾・単独の出度数と出現比率を記した表である。なお61種の契丹原字中、鉛筆で音価が記されたものが33種ある。

³ 吉池2011c。「契丹原字音価表」は、90種の契丹原字を挙げ、そのうちの43種に音価が付されている。「契丹原字出度表」を資料とし更に音価を増補したものであろう。

⁴ 長田礼子2011「長田夏樹年譜」の1952(昭和27)年10月の項に「京大の田村実造氏と小林行雄氏に呼ばれ、天理大の山崎忠氏と一緒に慶陵出土の契丹文字を記載した表を作成する。」(348頁)とあるところの表が「接尾語表」すなわち小林行雄・山崎忠・長田夏樹1953である。ただし表の作成は10月に始まったとして、その完成までには数ヶ月を要し、場合によっては『慶陵』奥付刊行年月53年3月以降にずれ込んだとも考えられる。その点については本稿の2.資料および3.『慶陵』所収「接尾語表」と「接尾語備忘録」を参照されたい。

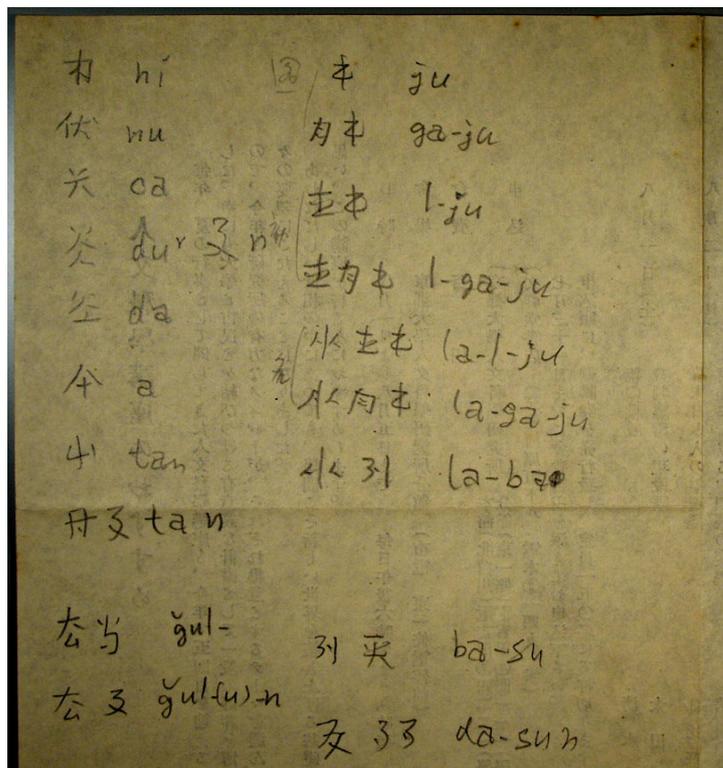
2. 資料

このメモは「人文科学講座のおすすめ」という案内のウラに鉛筆で走り書きされたものである。文字から受ける印象からみて長田夏樹氏の自筆に相違ない。オモテの講座案内によると主催は京都大学人文科学研究所人文学会であり、夏の行事として催された講座の第五回目のものであるという。日時は「八月一日より八月五日まで」とあるが年度は記されていない。『東方学報』(第24冊、1954年)462頁の「彙報 自昭和廿八年三月至同十一月」に事業概況として同一の夏期講座の紹介があるから、これは昭和28年(1953年)8月に開催されたものである。案内の配布期間を長く見積もって仮に4ヵ月前の年度始めの4月からとしたならば、案内のウラのメモは1953年の4月以降に書かれたものということになる。『慶陵』上巻の刊行年月は奥付によると1953年3月であるから、メモが書かれた時期は、形式的には『慶陵』上巻に挟み込まれた「接尾語表」の後ということになる。しかしながら、次節以降で言及することであるがメモの内容からみるならば「接尾語備忘録」は「接尾語表」の前にある草案のように見える。実際に上梓された時期よりも奥付の刊行期日のほうが早いというようなことはいくらかもあることなので、3月以降に書かれたメモを草案として『慶陵』上巻「接尾語表」が作られたとすることも不可能ではない。あるいはそうではないとしても、「接尾語表」は本体の『慶陵』とは別刷りとなつて挟み込まれており、このことは「接尾語表」の完成期日がずれ込んだため、本体とは切り離して後に挟み込んだということを示唆するものであ



るかもしれない。しかしながら、しばらくは『慶陵』の前後に書かれたとして議論を先にすすめることとする。以下この資料の写真と翻字を示す⁵。

⁵ なお翻字に用いた契丹小字は、内モンゴル大学の契丹文字再研究課題組と内モンゴル蒙科立軟件有限責任会社が制作したフォントである。使用を御許可くださった関係諸氏に感謝申し上げます。



- | | | |
|---------------------|-----|---------------------------|
| ① 和 ni | 「名」 | ⑫ 本 ju |
| ② 伏 nu | | ⑬ 为本 ga-ju |
| ③ 关 ca | 動 | ⑭ 立本 l-ju |
| ④ 炎 du ^r | | ⑮ 立为本 l-ga-ju |
| ⑤ 又 n | | ⑯ 水立本 la-l-ju |
| ⑥ 空 da | 名 | *⑰ 水为本 la-ga-ju 【水立为本の誤写】 |
| ⑦ 今 a | | ⑱ 水列 la-ba |
| ⑧ 中 tan | | |
| ⑨ 丹又 tan | | |
| ⑩ 谷当 gul- | | ⑲ 列又 ba-su |
| ⑪ 谷又 gul-(u)-n | | ⑳ 及又 da-sun |

⑰ 水为本 la-ga-ju は水立为本 la-l-ga-ju の誤写と考える。以下これを水(立)为本 la-(1)-ga-ju として示すが、その訂正の根拠は第 3 節および第 4 節で述べる。このメモでは 20 種の接尾語が幾つかのブロックに分けられており、接尾語の機能を考える上で参考となる。おそらく①から⑨までは名詞語幹に付す接尾語であろう。⑩⑪⑲⑳については考えはあるけれどもなお検討を要する。⑫から⑱までは名詞語幹や動詞語幹に接

辞を付して契丹語を拡張する様子記した部分である。

なお、契丹小字の一つ一つの所謂“原字”は、2 つから構成される場合左右に配し、3 つの場合は左右と下中央に配し、4 つの場合は左右と下左右に順を追って配するのがふつうである。ここに紹介する「接尾語備忘録」では原字が3 つある場合でも左から右に一直列に綴っており、碑文など実物での配し方とは異なる。しかしながら、このような綴り方は印刷にとっては便利であるため、これよりは縦に原字を配した『慶陵』所収の「接尾語表」の契丹小字を翻字する場合も、すべて左から右に横一直列に綴ることにする。

3. 「接尾語表」と「接尾語備忘録」の対照

『慶陵』所収の「接尾語表」は語幹と49種の接尾語を組み合わせて語を示した表である。以下は「接尾語表」のうち音価が付された33種の接尾語の部分左側に順に並び⁶、その右側に「接尾語備忘録」の契丹小字を配したものである。

「接尾語表」

01. 𐰽 ni
02. 𐰺 nu
03. 𐰽 du
04. 𐰽 da
05. 𐰽 ka
06. 𐰽 yi
07. 𐰽 yan
08. 𐰽 ca
09. 𐰽 ṅ
10. 𐰽 tan
11. 𐰽 𐰽 ta-ṅ
12. 𐰽 𐰽 ta-nu
13. 𐰽 𐰽 l-du
14. 𐰽 𐰽 l-yan
15. 𐰽 𐰽 l-(u-)ṅ
16. 𐰽 𐰽 l-ga
17. 𐰽 𐰽 da-sun

「接尾語備忘録」

- ① 𐰽 ni
- ② 𐰽 nu
- ④ 𐰽 du^r
- ⑥ 𐰽 da
- ⑦ 𐰽 a
- ③ 𐰽 ca
- ⑤ 𐰽 n
- ⑧ 𐰽 tan
- ⑨ 𐰽 𐰽 tan
- ⑩ 𐰽 𐰽 ḡul-
- ⑪ 𐰽 𐰽 ḡul-(u)-n
- ⑫ 𐰽 𐰽 da-sun

⁶ 音価が付されていない接尾語については吉池 2011a を参照されたい。ただし、吉池 2011a は接尾語の数を48種とする。この数は、「接尾語表」で欠落(あるいは省略)している𐰽を数えない場合の数字である。

18. 爰弱 ㄹ da-sun-ni
 19. ㄹ ㄱ la-ku
 20. ㄹ ㄱ ㄹ la-ku-ni
 21. ㄹ ㄹ la-ba ㉘ ㄹ ㄹ la-ba
 22. ㄹ ㄹ ㅍ la-ba-su
 ㉙ ㄹ ㅍ ba-su
 23. ㄹ ju ㉚ ㄹ ju
 24. ㄹ ㄹ ga-ju ㉛ ㄹ ㄹ ga-ju
 25. ㄹ ㅍ ga-cu
 26. ㄹ ㅍ ga-sa(C)
 27. ㄹ ㄹ ğul-ju ㉜ ㄹ ㄹ l-ju
 28. ㄹ ㄹ ㄹ ğul-ga-ju ㉝ ㄹ ㄹ ㄹ l-ga-ju
 29. ㄹ ㄹ ㅍ ğul-ga-cu
 30. ㄹ ㄹ ㅍ ğul-ga-sa(C)
 31. ㄹ ㄹ ㄹ la-ğul-ju ㉞ ㄹ ㄹ ㄹ la-l-ju
 32. ㄹ ㄹ ㄹ ㄹ la-ğul-ga-ju ㉟ ㄹ (ㄹ) ㄹ ㄹ la-(l)-ga-ju 【実際には ㄹ ㄹ ㄹ】
 33. ㄹ ㄹ ㄹ ㅍ la-ğul-ga-cu

この両者には接尾語の配列順と接尾語内部の原字の構成において一致する部分のみられる。『慶陵』所収の「接尾語表」から一部分を抜き出して「接尾語備忘録」を書いたものか、或いは草案として先にあったものに相違ない。音価をみると、両者一致するものが多いけれども、「接尾語表」の 03. ㄹ du や 05. ㄹ ka や 14. ㄹ l や 27. ㄹ ğul を、「接尾語備忘録」では ㉜ ㄹ du^r や ㉟ ㄹ a や ㉚ ㄹ ğul や ㉜ ㄹ l とするなど音価を異にする部分もある。なお 14. ㄹ と ㉚ ㄹ は異体字。いま若干の原字につき、関連する資料の音価を比較すると次のとおり。

「接尾語表」 「接尾語備忘録」 「契丹原字音価表」 「契丹原字出度表」

ㄹ	ni	ni	NU	nu
ㄹ	du	du ^r	DUR	dur
ㄹ	ka	a	SA	sa
ㄹ	l	ğul	LA	la
ㄹ	ğul	l	RU	ru

ㄹ を ni とするのは長田夏樹 2001 でも同様であるからこれは「接尾語備忘録」「接尾語表」以降一貫したものである。一方、ㄹ に du^r・DUR・dur など-r を付すのは「接尾語備

忘録」までとなっている。このような音価の分布をみる限り、手書きメモの「接尾語備忘録」が先にあり、それを修正して正式な「接尾語表」ができあがったと解するのが自然であろう。もっとも、先に確認したように『慶陵』奥付の刊行期日に従うならば、「接尾語備忘録」は「接尾語表」の後にできたことになる。いましばらくは「接尾語備忘録」は『慶陵』「接尾語表」の前後にできたとしておく。

なお、接尾語内部の原字の構成において一致しないものが2つある。そのうち⑱ **𐰇𐰏𐰤** ba-su は 22. **𐰇𐰏𐰤** la-ba-su の **𐰏𐰤**のみを記したと解し得る。⑰ **𐰇(𐰏)𐰤** la-(1)-ga-ju は前節で述べたように、実際には **𐰇𐰤**と書かれており、それが正しいとしたならば、対応する接尾語がないことになってしまう。先に **𐰇𐰤**を誤写とした所以の一つである。それが **𐰇𐰤**ではなく **𐰇𐰏𐰤**であらねばならない理屈は次節で述べる。

4. 接辞による契丹語の拡張

さて、『慶陵』所収の「接尾語表」には簡単な説明があるのみであるから⁷、その構成と機能にどのようなものを想定していたかということについては、「接尾語表」自体を検討して推測するしかないのであるが、「接尾語備忘録」には接尾語の機能の一部を知り得る箇所がある。以下に示す。なお説明の便宜のため **𐰤**と **𐰤𐰏**を□で括った。

「名」		𐰤	ju	
		𐰤𐰏	ga-ju	
動		𐰏𐰤	l-ju	
		𐰏𐰤𐰏	l-ga-ju	
名		𐰇𐰏𐰤	la-l-ju	
		𐰇(𐰏)𐰤𐰏	la-(1)-ga-ju	【実際には 𐰇𐰤𐰏 】
		𐰇𐰏	la-ba	

「名」(便宜上「」としたが、名を□で囲んだもの。2. 資料の写真を参照されたい)

⁷ 「接尾語表」(1)の右下には次の説明がある。「本表は慶陵出土の四種の契丹字哀册中より、契丹字契丹語の名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等の主要なるものを摘出して、分類表示したものである。ただし類例の豊富でないものは省略した。各字の出典は、興宗哀册文A、仁懿皇后哀册文B、道宗哀册文C、宣懿皇后哀册文Dなる略號をもつて、各字の下に示した。なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。(小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製)」。この説明によると中世蒙古語と比較して契丹原字の音価を推定したとあるが、具体的にどのような手順を踏んで推定に至ったかということについては不明である。

は名詞語幹を示すものとおもわれる。したがって**ネ** ju と**ガネ** ga-ju は名詞語幹に付される何らかの付加成分ということになる。その下にある漢字の動が、動詞を示すとする、**立** l は動詞から名詞を作る名詞形成接辞であり、これに名詞語幹の付加成分である**ネ** ju と**ガネ** ga-ju が付されたものと解することができる。さらにその下にある漢字の名が、名詞を示すとする、**ハ** la は名詞から動詞を作る動詞形成接辞であり、これに名詞形成接辞**立** l と名詞語幹の付加成分である**ネ** ju と**ガネ** ga-ju が付されたものと解することができる。すなわち、「名+**ハ立ネ** la-l-ju」は、名詞+**ハ**(動詞形成接辞)+**立**(名詞形成接辞)+**ネ**(名詞語幹の付加成分)となる。「名+**ハ(立)ガネ** la-(l)-ga-ju」は、実際には「名+**ハガネ** la-ga-ju」と誤り記されているが、これも名詞+**ハ**(動詞形成接辞)+**立**(名詞形成接辞)+**ガネ**(名詞語幹の付加成分)でなければ理屈に合わない。先に誤写として訂正した所以である。そうすると、次の**ハ刈** la-ba は**ハ**(動詞形成接辞)+**刈**(動詞語幹の付加成分)を意図したものということになる。この動詞形成接辞の**ハ** la であるが、これは名詞から動詞を作る接辞として多用される蒙古語文語の la, le に当てたものに相違ない。名詞形成接辞の**立** l であるが、これも動詞から名詞を作る接辞として多用される蒙古語文語の l に当てたものに相違ない。名詞語幹に付される何らかの付加成分とした**ネ** ju と**ガネ** ga-ju については対応する適当な蒙古語を知らない⁸。

5. 結語

「接尾語備忘録」において、長田夏樹氏は、**ネ** ju と**ガネ** ga-ju を名詞語幹に付す何らかの付加成分とし、**ハ** la を名詞語幹に付して動詞を形成する接辞(動詞形成接辞)とし、**立** l を動詞語幹に付して名詞を形成する接辞(名詞形成接辞)として機能し得るものと考えておられたことがわかる。接辞によるこのような契丹語の拡張という考え方自体はそのまま『慶陵』の「接尾語表」にも当てはまると予想し得るが、両者には音価において異なる部分がある。

	「接尾語備忘録」	「接尾語表」
ハ	la	la
立	l	gʊl
ガ	gʊl	l

動詞形成接辞の**ハ**の音価については両者共に la であるが、**立**と**ガ**の音価は逆になっており、gʊl の機能をどのように想定していたかが問題となる。どうも、「接尾語備忘

⁸ 蒙古語文語については小沢 1997 を参照。

録」と「接尾語表」における契丹語の拡張方法には相違があるようである。わたしはこの相違を「接尾語備忘録」から「接尾語表」への考え方の発展と見たいのであるが、この点も含め『慶陵』に付された「接尾語表」の構成については、別の機会に詳しく検討しなければならない。なお言うまでもないことであるが、ここでは**ネ**と**カネ**と**ハ**と**立**の機能につき「接尾語備忘録」の考え方を紹介したままで、言語事実としての是非については別に検討しなければならない。

〈参考文献(発行年順)〉

- 田村實造・小林行雄 1952-53. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は1953年、下巻は1952年発行。
- 小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊) 田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。
- 長田夏樹 1984. 「契丹語解読方法論序説」, 『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49頁。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社。
- 小沢重男 1997. 『蒙古語文語文法講義』大学書林。
- 長田夏樹 2001. 「契丹漢字音探源 —契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について—」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』ナカニシヤ出版, 724-737頁。
- 長田礼子 2011. 「長田夏樹年譜」, 『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011. 好文出版), 343-360頁。
- 吉池孝一 2011a. 「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」, 『KOTONOHA 百号記念論集』(古代文字資料館)単刊第5, 90-107頁。
- 吉池孝一 2011b. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど —契丹原字出度表—」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第103号, 9-19頁。
- 吉池孝一 2011c. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど —契丹原字音価表—」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第105号, 19-26頁。